

2025.12.25

# 「ふくしま学宿 2025」 報告書

報告者 木内 保太郎

2025.12.15－17 の 2 泊 3 日で「ふくしま学宿」が行われた。参加生徒：高校 1 年生 30 名，引率教諭：乾 大介・木内 保太郎の 2 名。訪問先は図 1 の通り。



図 1 「ふくしま学宿」での訪問先。 宿泊先は 2 日間ともに Jヴィレッジ。

提供元：福島県観光物産交流協会

以下に、訪問順に研修内容を紹介する。

## 1 日目

### 【東日本大震災・原子力災害伝承館】

地震、津波、原発事故の複合災害にあった福島の様子を映像と資料、そして震災体験者による語りを通して伝えていく施設。エントランスは、吹き抜けの構造になっており、その中央の柱には、津波が到達したライン（約4m）が示されている。今回はガイドとともに展示資料を見学。原発模型や小学校に残された品々。黒板に残された避難された方々のメッセージなど、当時の緊迫感を伝える。



### 【震災遺構浪江町立請戸小学校】

津波により大きな被害を受けた校舎を震災遺構として残している。1 階の荒廃した様子から津波の被害の大きさを窺い知れる。2 階の黒板には一次立ち入りの際に残された住民たちの書き込みや、当時の在校生が震災から 10 年の節目の時に書いた今の思いが文集として展示されている。立地としては、海岸線に近く、避難のタイミングが遅れば、大勢の犠牲者が増えたであろうことが容易に想像できる。



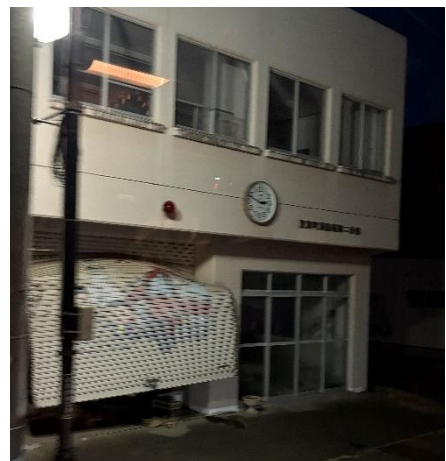
### 【大平山霊園】

現在は震災遺構として残っている浪江町立請戸小学校の教員、児童全員が避難してきた大平山の高台から浪江町を見下ろし、フィールドパートナーから話を聞く。この場所が津波被害による「命の境目」になった場所だと説明を受ける。ここには、犠牲者の鎮魂と、復興の象徴として、「宇宙桜」と呼ばれる桜が植えられている。フィールドパートナーが JAXA に依頼して、宇宙空間から持ち帰った数百の桜の種から 2 つだけが発芽したその 1 つである。将来、「この桜の下に県民が集い、花見ができるようになるようになるまで復興されることを願っている」と話された。



### 【双葉駅周辺】

双葉町の人口は現在約 170 人。現在の双葉町で居住可能な地域は町の面積の約 15%程度とのこと。駅周辺からの復興を進めているが、今なお震災当時のままの家屋も多く残っている。FUTABA Art District というプロジェクトによって、人々の笑顔や双葉名産のだるまなどをモチーフにした壁画が多数町中に描かれている。また、駅前には、地震発生時のまま止まった時計が飾られている。あの日の記憶と象徴として止めたままにするべきか、未来に時を進めるべきか、あるいはかつての故郷に時を戻すべきか。「災害」「原発」「復興」「地域」など福島の課題を、地域住民の声とともに「止まったままの時計」の在り方について考えた。





## 【Jヴィレッジ】1 泊目

海拔 40m に位置するため津波の影響はなく、建物にも大きな被害は見られなかった。ここは福島第一原子力発電所からちょうど 20km ラインの外側にあり、地震発生の数日後には原発事故収束の対応拠点として使用されることとなる。2018 年 7 月に一部施設を再開、2019 年 4 月 20 日には全施設の営業を再開することとなる。

### ・葛力創造舎代表理事 下枝さんとの対話

代表理事の下枝さんは葛尾村出身であり、震災を機に故郷へ戻る。葛尾村の活性化をはかる活動が続ける。今回は「村とは何か」「村づくりとは何か」という問い立てのもと、地域に閉じない活動、人間関係の構築という点で話をいただいた。また、本校の生徒並びに教員も彼の地域を活性化させるプロジェクトに参加し続け、毎年、田植えや稲刈りなどを行っている。



## 2 日目

### 【水素エネルギー研究フィールド】

元々は東北電力が原子力発電所を建設する予定だった土地であるが、福島第一原発事故によって計画が白紙になった場所である。現在は約 68,000 枚のソーラーパネルが並び、研究中的の水素エネルギー、グリーンアンモニアの研究施設が立地している。周辺（浪江町）は水素社会実現のためのモデルケースとして、水素で走る自動車、水素ドローンなど、様々なものが開発され実用化されている。また、FLAM と呼ばれる福島の木材を使用した集成材を作る施設も隣接しており、ここで作られた木材は 2025 年大阪万博の大屋根に使用される木材の一部となった。



### 【福島 RDM<sup>2</sup> センター】

北海道苫小牧市に本社を持つ、會澤高圧コンクリート株式会社の研究施設である。ここ福島に研究施設を置くことにより、地域への雇用問題、エネルギー問題などに大きく貢献している。ここでは、伝導性カーボンブラックをコンクリートに添加することにより、伝導性を実現した「蓄電コンクリート：ec<sup>3</sup>」は、蓄電能力を有しながら、発熱させることもできる。日中に太陽光で充電させたコンクリートが、夜間路上に降り積もる雪を溶かし続ける実証実験を観察できた。今後雪国には欠かせない技術となるであろう。また、コンクリートにバクテリアを添加した「自己治癒コンクリート：Basilisk」は、ひび割れから空気と水が浸入すると、炭酸カルシウムを生じる。半永久的にクラックを修復し続ける。正に、コンクリート技術の最先端を行く研究機関である。



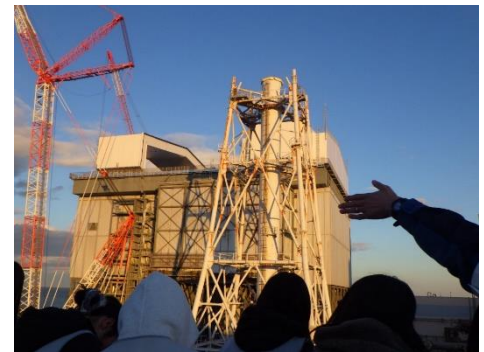
### 【東京電力廃炉資料館】

原発事故の記憶と記録・反省と教訓、廃炉現場の最新状況等を発信するために東京電力が運営する資料館。原発事故当時の状況、事故の教訓や廃炉進捗状況等について学ぶことができる。福島第一原子力発電所構内を見学するにあたっての諸注意や廃炉の流れなどを説明される。



### 【福島第一原子力発電所】

私服の上に簡易ベストを着用し線量計をポケットに入れ、本人確認の上ゲートにくぐって入構する。線量計の数値は、原子炉に近づくごとに上がっていくことが確認できた。ブルーデッキ（大熊町）と呼ばれる高台から廃炉作業が行われている原子炉建屋（1号機～4号機）を実見する。グリーンデッキ（双葉町）と呼ばれるところからは、ALPS処理水関連設備や5号機6号機側の設備、津波によって変形したタンクなどが見学できる。現在ALPS処理水は多量の海水と混ざって、沖合約1kmの地点で放水されている様子などを、説明を受けながら見学した。最後に線量計の数値を確認すると、この見学を通しての被ばく量は0.013～0.015mSvであった（2025.12現在）。1年間の自然被ばく量は2.1mSv/年、なので1日当たりに換算すると0.006mSv/日、となる。したがって自然被ばく量のおよそ2日分であり、胸部X線検査1回分にも満たない量である（図2参照）。このふくしま学宿を通しての被ばく量を気にされる生徒・保護者には、この数値を伝え風評被害を防ぎたい。



提供：東京電力ホールディングス

### 【Jヴィレッジ】2泊目

#### ・はま福 TOMIOKA 福島さんとの対話

東日本大震災発生時に医療従事者として現地に派遣され、過酷な被災地での救護活動や、町全体の避難の困難さなど、当時の写真とともにお話しいただいた。人命救助の最前線のリアルがそこにはあった。





### 3日目

#### 【中間貯蔵事業情報センター】

中間貯蔵施設の説明と見学ツアーが実施された。一般の訪問者も参加できる。中間貯蔵施設には、除染土壌・廃棄物の「一時保管施設」と、原子力発電所の「使用済み核燃料の一時保管施設」の2種類があり、どちらも最終処分（2045年）までの間、安全に集中的に管理・保管する役割を担っている。この土地は、第一原発から3km以内であり、今も帰宅困難地域となっている。以前は、民家や田畑が広がっていたが、住民および土地の所有者の協力のもと、福島全土に広がっていた1400万m<sup>3</sup>もの除染土壌をこの施設に集めている（現在9割程度が完了している）。ここでは、除染作業が済んだ場所の放射線量を測定したり、施設の安全性などを確認したりすることができた。



#### 【CREVA おおくま】

旧大野小学校の建物を活かしながら、大熊町民だけではなく町外、県外の人たちとの交流の場、新たな企業、ビジネスのスタートアップを支える場所として設立された。だれでも無料で使える交流スペースのほか、安価に利用できる会議室などがあり、一部には小学校の教室やいす、机の様子をそのまま残している部屋もある。

##### ・株式会社 ReFruits 原口さんとの対話

この大熊町は、比較的寒暖差が少なく、キウイフルーツを育てるのに適した土地とのこと。国産キウイを世界に、「キウイといえば大熊」と呼ばれることを夢に、新種の開発研究に取り組んでいる。生徒たちは、除染土壌の回収や、新しい農業の形を模索するなど、福島の復興に向けて日々努力している姿を目の当たりにした。

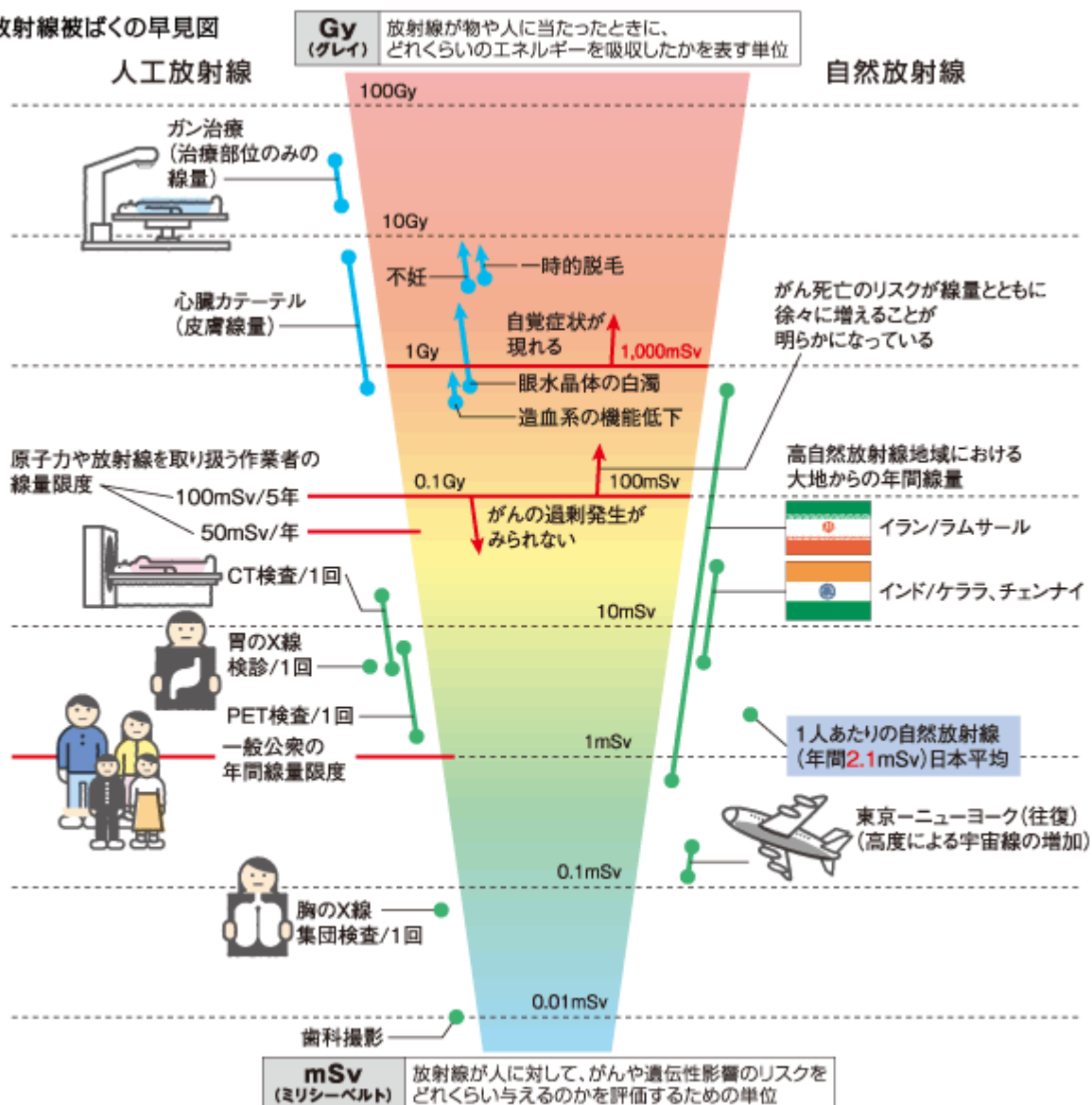


##### ・振り返りワークショップ

原発事故により全村避難となっていた双葉郡葛尾村において関係・活動人口により成り立つ新しい地域づくりのかたちを生み出した「葛力創造舎 下枝さん」や、東日本大震災発生時に医療従事者として現地に派遣され筆舌しがたい過酷な被災地で救護活動に従事した「はま福 TOMIOKA 福島さん」、福島復興を農業という形で実現するべく起業した「ReFruits 原口さん」たちとの対話を通じて、偏見のない目で情報を取得することと、行動を起こすことの重要性を学びました。日に日に視野と思考が広がり、生徒が成長する姿は非常に頼もしく思えた。今後は、福島の実状を知る一高校生として、今なお続く風評被害をなくすよう、アンバサダー活動を進めていく意思を語った。



# ■ 放射線被ばくの早見図



※ 数値は有効数字などを考慮した概数です。

参考: (独) 放射線医学総合研究所

図 2 放射線被ばくの早見図

提供元: (独) 放射線医学総合研究所